中国政治の異常と安定　回転灯　今週の日本-1973.12.02

日本文化会議シンポジウム「自然の思想」から考える

文明と自然の調和的関係

必要なのは軌道修正

底浅かった最近の反文明論

シンポジウム「自然の思想」の会場風景

しょせんは軽薄な流行

ひところ、あれほどに横行していた、いわゆる反文明論も、しょせんは、軽薄な、一時の流行にすぎなかったようである。

〝脱都会〟とか〝自然に帰れ〟とか〝人間の回復〟とかいう言葉が、それこそ、お題目のように語られ、テレビのコマーシャルでまで騒をきかせたことは、まだ記憶に新しい。冗談をいわせてもらうならば、それは、さながら、明日にでも、全人類が石器時代の原始生活に逆もどりしかねないような気配でさえあった。しかし、蓋が開けばおりなら、いま時分、マイカーを捨てているはずの日本人が石油危機にあわて、耐乏生活の覚悟が出来ているはずの団地族が、灯油やトイレットペーパーの買いだめに走りまわる。反文明論者にとっては、ブラックなユーモアというほかない。

あるいは、一世を風靡（ふうび）したともいえる反文明論が、このようにして惨憺たる結果に終わったのは、もちろん、なんでも風俗化してしまわなければすまない近ごろのマスコミ状況による、ということも出来ようが、同時に、これまでの反文明論が持つ論理の粗末さ、洞察の浅さに原因するところが大きい。なるほど、それは、文明の罪過について、指摘することは多かった。が、文明の罪過を指摘することに性急のあまりか、人間と文明の関係、人間と自然の関係、そして、文明と自然の関係について、それは、なんら根本的な検討を加えようとしなかった。あえていうならば、それはあまりにも短絡的だったのである。

自然をカバーする技術

日本文化会議（理事長＝田中美知太郎京都大学名誉教授）が、この十一月十七、十八の両日、神奈川県大磯町の大磯ロングビーチホテルで「自然の思想」というテーマのシンポジウムを行ったのも、おそらく、そのような現状への認識が前提となっている、ということが出来るだろう。

当然のことながら、そのシンポジウムは、田中美知太郎氏の、自然に対する哲学的考察から始まった。その「自然物、自然、自然界」と題する報告の中で、田中氏は、ギリシャ時代の自然観を検討しながら、自然とは何か、ということを言葉ある言葉で語ったが、ここでの便宜上、単純化していうならば、自然は、人工、技術、従って人間との関連なしに考えることは出来ない、ということである。

「われわれに興味があるのは、アリストテレスが『自然』の規定を取り出すために、自然物を人工物すなわち人工から生れたものに比較し（両者の差異から）その規定を導き出してある点である……少し強地悪くいえば、アリストテレスの『自然』の規定は、既に『自然』と『人工』の対立といったやうなものを前提とし、この先入見にとらわれてなされたのである」

逆説ふうに、文明と自然を対置させるやり方も、実は、アリストテレスの昔からであったというわけなのである。

そのために付け加えておかなければならないのは、しかし、「対立」という言葉が使われてはいるものの、人工と自然が「敵対」関係にあったわけではない、ということである。

「全般的には、技術は自然が仕上げることのできないものを完成したり、あるいは真似したりするものなのである」

田中氏は、このようなアリストテレスの言葉を引用して、人間の技術と自然との「調和的な」関係を認めるのである。文明を自然の「敵対物」とする考え方とくらべるに、いかにも異質であったことが分かる。

未開人の自然観に興味

芹田健太郎氏（東京大学教授）が「その中の自然」と題して行った報告は、文化人類学の立場から、未開人の自然観を考察したものであった。

一般論としていうならば、自然観というものは、民族によって、また、時代によって異なる。しかし、そのような差異があるにもかかわらず、その根底に、類似があることも認めないわけにはいかない。それは、自然や森羅万象を二元的に分類するというやり方である。

このことに関して、興味深いのは、ニューギニア高地のカラム族における、ヒクイドリとタロイモとの関係であろう。

すなわち、カラム族は、ヒクイドリの狩りをするとき、日常の言葉を使ってはいけない。ヒクイドリを殺した人間は、その心臓を食べなければならないし、タロイモ畠に近づいてはならない。料理は畠の中でしなければいけないし、料理に用いた道具をタロイモ畠に持ち込んではいけないなど、さまざまのタブーがあるというのである。

芹田氏は、これを、ヒクイドリの狩りをするとき、日常の言葉を使ってはいけない。ヒクイドリを殺した人間は、その心臓を食べなければならないし、タロイモ畠に近づいてはならない。料理は畠の中でしなければいけないし、料理に用いた道具をタロイモ畠に持ち込んではいけないなど、さまざまのタブーがあるというのである。

芹田氏は、これを、ヒクイドリは狩猟の獲物であるのに対し、タロイモは耕作、すなわち文化の産物であるところからくると解釈し、「ヒクイドリとタロイモ、森（自然）と耕作（文化）という二項対立を認めるのである。ここでも、また、われわれは、人工、技術（耕作）と自然（森）を対置させるやり方に出会う。それは、どうやら、人間にとって基本的な思考パターンであるようにも思われる。

生理、工学的立場の考察

そこで問題になるのが、一体、人工、技術、あるいは、その担い手である人間と自然は、本来、「敵対」関係にあるのか、それとも「調和的な」関係にあるのか、ということであろう。

そのような問いに対して、藤井隆至氏（東京大学名誉教授）が「生命の思想」というテーマで生理学の立場から、また、崎川範行氏（日本大学教授）が「技術と自然」というテーマで工学者の立場から行った報告は、なかなか示唆に富んだものであった。

「現代の日本人は、生命が自然とつながっていることを忘れている」

報告の冒頭で、藤井氏が、こう語ったのは、おそらく、科学技術一辺倒の思想に対する批判であろう。

「『生』がどこからくるかといえば、それは自然からくる。それは正しく自然から賦与されたもので、それ以外の何ものからでもない……自然はわれわれの外部にあるばかりでなく、われわれの内部にもあるのであり、ひとが何事かを実現するのも自然の無意識的な力、天分というものが身うちにはたらいた結果である」

人間は、自然と「敵対」関係にあるどころか、自然によって生存を保証されている、つまり自然的存在なのである。

崎川氏が語ったのも、同じようなことである。すなわち、われわれの地球における本来の自然は、まず、無機物質の世界であった。そこに有機物が発生し、やがて生命を持つ物質が生まれ、ついに人間にまで進化した。

「自然界の変化と物質の進化は、一つのパターンに従って進んできたのであり……人間も、また人間が作り上げている有機体である社会も、そのパターンから外れているわけのものではない」

そして、近代的な生産設備が発生し、それが自然環境を破壊するほどの力を持つに至ったのも、やはり、そのような自然の法則に従っての、必然的な結果のように思える、という。

しかし、崎川氏は、さらに言葉を続けて、いうのである。

知性という独特の性格

「人類は他の生物とは異った一つの性格を獲得していると言える。それは頭脳を用いて考えることによって、各種の現象を分析し、一応独自の見解で行動することができる点である……それは知性によって自然のパターンからかなり離脱した働きをすることができるという意味であり……ときには自然のパターンを修正し、環境の悪化を阻止して生き延びるためには、技術を駆使することも起ってくるはずであり……」

反文明論が思想としての有効性を持ちえなかったのは、おそらく、人間と自然と文明の関係を有機的にとらえようとしなかった点に原因があるように思われる。われわれが当面しているのは〝反〟文明ではなく、文明の軌道修正である、というべきであろう。

回転灯

中国政治の異常と安定

中嶋瀬雄

ぼつぼつ師走の声がきこえてくる。内外ともにあわただしい昨今だが、お隣の中国の政情には、繁栄と過剰のなかでのエネルギー・ショックなどとはくらべものにならない厳しいものがあるようだ。中国共産党の十全大会で、毛・劉体制が確立されたかれた突先「孔子批判・始皇帝評価」のキャンペーンが激しく起こっていて、孔子に殺されたという論敵・少正卯がにわかに称えられている。このキャンペーンが底に含むものは、かなり不気味で深刻な「復権と反復権の闘争」であるらしく、〝林彪裏切り〟でもあることを暗示している。

そうしたなかで、一時、盛んであった全国人民代表大会開催への関望も、このところずっかり潤んでしまった。もっとも、前回の全国人民代表大会は六四年十二月から六五年の一月にかけてのだし、その例からすれば、この暮れに、あわただしく招集される可能性も残ってはいるが、どうも今年もそれは開かれずにおわりそうである。

私自身は、昨年のいまごろ、七三年の中国情勢を展望する記事を二、三の雑誌や新聞に求められたときにも、またまた全国人民代表大会が開かれ得る状況ではないだろう、と述べてきたので、そうするとやはり私の推測とおりになるのかもしれない。だが一般には今年こそ全国人民代表大会が開かれるといわれてきたし、とくに八月末に十全大会が開かれてからは、国慶節前後にいよいよその開催が必至であるとの推測しきりであった。

もっとも、全国人民代表大会というのは、ちょうど一院制の国会に相当するのだから、憲法上は毎年開かれねばならないし、四年ごとに国家主席や国務院総理以下の閣僚も改選されねばならず、国民経済計画の決定や国家の予算・決算の審議と承認もそこで行われなければならないのがタテマエである。

しかも、皮肉なことに、こうした憲法上の措置が実施されているかどうかを監督するのも全国人民代表大会なのであり、こうしたタテマエからすれば、そもそも全国人民代表大会が今年は開かれるだろうかと推測しなければならないこと自体が異常なのである。だが一方、現実には、それがもう九年間も開かれないまま、国家の公事がすべて権力者とその党内闘争によって決せられているのである。わが国で九年間も国会が開かれず、その間にすべての重要事が一党の恣意で決せられたと仮定すれば、どのような反応が起こるか、想像してみるとよい。

それなのに、こと中国に関するかぎり、その異常さが気づかれずに政治の安定がしばしば語られる。

それにつられて、外国との条約を批准するタテマエの国家主席も不在なのに、日中平和条約の締結が謳われたり、九年間も国会がなきままなのに、日中議員交流などが提案されるのだから、まことに不思議であり、滑稽であるといわねばならない。

（東京外語大助教授）